



徳之島の自家焙煎の「コーヒーをいただく」

金丸弘美
食総合プロデューサー

東京都世田谷区代田の「GLABELL COFFEE」(グラベルコーヒー)を夫婦で訪ねた。小田急線・世田谷代田駅北口から徒歩1分。角地の2坪ばかりの白と木目を基調とした瀟洒なお店。前に可愛らしいベンチがひとつ。営業は金曜日と土曜日の13時から17時までのみ。店内は小さいカウンターと丸椅子が2つ。自家焙煎コーヒー販売専門店。もちろんコーヒーも飲める。

お店は、店主の狩野知代さんと、編集者の藤原ゆきえさんのお二人で切り盛りしている。ゆきえさんは私の先輩。彼女との縁で狩野さんと知り合った。二人の共著『新版 休みの日には、コーヒーを淹れよう。』(書肆侃々房)という素敵な本がある。豆選び、焙煎、ポット、ドリッパー、テイスティングと丁寧に紹介されている。本で二人が好きなの一つにあげられているのが徳之島・吉玉誠一さんのコーヒー。それをリクエストした。「焙煎して用意します」と連絡があった。島から豆が送られ年間30杯の限定品。鹿児島・奄美群島の徳之島は私の妻の両親の生まれ故郷。島で知り合ったのが吉玉さん。当時、島に焙煎するところがなかった。それで、たまたま、島の旅のことをゆきえさんに話したのがきっかけ。その後、狩野さんは島の吉玉さんを訪ね、それから生豆を送ってもらってきたとのこと。

「島の土壌で育ち、優しい味わい」と、ゆきえさん。「島の黒糖を齧りながら飲むと美味しい」という吉玉さんから届いた黒糖がついている。

私たち夫婦は、結婚して間もなく世田谷代田に住んでいた。そのあと同じ沿線の祖師谷に移住したが、二人の子供が小学生の頃、徳之島に移住し子供が高校卒業するまで過ごした。「子育てを自然環境のよいところでした」という思いからだった。

そのとき島で出会ったのが吉玉誠一さん。農家の方に「仲間のコーヒー豆ができたから、畑を見に来ないか」と言われて行き、島の雑貨屋の店先でコーヒーを出してくださったのが、島で初めてコーヒー栽培をしたという吉玉さんだった。ニッパポッカを穿いて、髭を生やし、笑顔がたえない。



それもそのはず、コーヒーは、彼が20年かけて120本の木を育て40本が実をつけ、初めて収穫した掌一杯ほどの豆。しかも一粒一粒を枝から果実を採り、

東京に来た時に店に寄った吉玉誠一さん

(写真・藤原ゆきえ)

奥さんの道子さんとともに豆にしたもの。果実を水に漬け、浮いたものをより分け、果肉を省き豆を取り出し、天日で4週間かけ乾燥させ、豆の皮を手で剥いた。豆を焙煎するところがない。それで沖縄県名護市のコーヒー店に行き焙煎してもらって生まれた豆だった。

いただいたコーヒーのなんと爽やかで美味しかったこと。そして畑を見せていただき、そこに小さい蒼色や洋紅色の、さまざまな光彩を放つ、寶石のような、コーヒーの実を見たのだった。

訊けば、吉玉さんは、宮崎の出身で昭和20年生まれ。親の農業を継ぎたかったが、できなくて、親の勧めで大阪の鉄工所で働いた。農業の夢を捨てきれずブラジルへの移民を考えたが、すでに移民は打ち切られていて、親の反対もあり断念。昭和56年、核燃料再処理工場が徳之島にできるという噂がたち、それに反対する運動家と吉玉さんは知り合い、島の反対運動に同行。そのとき36歳。そのまま島に移住し土建業の傍ら農業を始めた。



吉玉さんの生豆から焙煎したコーヒー。
横に徳之島の純黒糖（写真：藤原ゆきえ）

あるとき奄美大島・宇検村でブラジルから来たコーヒーをみつけ、苗木を分けてもらい栽培を始める。育ち始めたら区画整理で、できなくなり、別のところで育てたら台風で倒木。台風を避け窪地を探

し栽培。紆余曲折があり、ようやく育ったコーヒーだったのだ。千本の木を育て仲間を増やしたいと夢を語っていた吉玉さん。

そのあと、私と妻と島の人たちと、徳之島のツアーを組み、吉玉さんの畑見学と自家焙煎のコーヒーをいただき、植樹するオーナー制度をコースに組み込んだ。大好評だった。

そして吉玉夫妻は、徳之島・伊仙町の海のそばの犬田布岬に「自家焙煎珈琲スマイル」を出した。「徳之島コーヒー生産者会」も生まれ、町も支援し現在30名が栽培。コーヒーアイランドを目指しているという。実験圃場もあり味の素AGF(株)と丸紅(株)が支援しているということを知った。

徳之島を紹介するフリーペーパー『ほつとくの』がある。2023年special版は吉玉さんが表紙でコーヒー特集。これによると味の素AGF(株)に入社した山崎真佑さんが、学生時代、徳之島に行き吉玉さんと出会いコーヒーのことを卒業論文に書いたことがきっかけ。会社入社後、味の素AGF(株)と丸紅(株)がコーヒー栽培に協力することとなったという。栽培の手法、品種の選定など支援がされている。現在は、伊仙町役場経済課にコーヒー担当がある。まだ量はないというが、伊仙町役場や島の2軒のコーヒー店で飲めるとのこと。2023年の暮れ、島の友人・丸野清さんから「コーヒーのレジエント、吉玉さんが亡くなりました」と連絡を受けた。

それで藤原ゆきえさんに連絡をしたというわけだった。吉玉さんのコーヒーがほんのわずかだが、まだあるという。出かけたこの日、私たち夫婦のために狩野さんが2杯分だけ特別焙煎をしてくださり、4人で吉玉さんのコーヒーを狩野さんの「献杯!」の発声でいただいた。今も、素敵な笑顔の吉玉さんが、いる。